COSSS report

Chuetsu Organization for Safe and Secure Society.

公益社団法人 中越防災安全推進機構　機関紙
2014 冬
VOL. 6

「雪と共に、自然と共に、生きていく」
―豪雪地帯に暮らす人々の知恵と技―

―越後雪かき道場 (川口木沢)―

contents

特集① P2-3
「越後雪かき道場」

特集② P4-5
「にいがたイナカレッジ事業報告」

【シリーズ】P 6「人と人」別府　茂・土田　直美
【COSSS リレーエッセイ】「移住とは」 復興デザインセンター　金子　知也
【連載】コラム・視点防災 【その他】インフォメーション、施設のご案内、会員募集

特集①「越後雪かき道場」

「越後雪かき道場」の誕生
～中山間地の冬の課題とは～

今冬は例外的に太平洋側でも多くの被害がもたらされた大雪による災害。毎年のように雪と闘ってきた新潟県の中山間地域は「特別豪雪地帯」であり、同時に過疎高齢化の進む地域でもある。二〇一一年、一二年と二年続けて災害救助法が適用になるほどの豪雪に見舞われ、「越後雪かき道場」（以下：「雪かき道場」と略す）の取組みが注目を集めるようになった。

「雪かき道場」誕生のきっかけは、平成一八年豪雪である。約二〇年ぶりの豪雪であり、全国で死者百五十二名（戦後二番目）、負傷者二一三六名という被害を出した。死者の四分の三が除雪作業中の事故であり、三分の二が六五歳以上の高齢者である。災害が起こると、地域の脆弱な部分が少なからず露呈してしまうものであるが、特に過疎高齢化の進む豪雪地帯の地域では、自助や地域内共助だけでは対応しきれない部分も多くあり、除雪作業における安全確保と雪処理の担い手確保が喫緊の課題として挙げられた。

平成一八年豪雪では、実は多くの除雪ボランティアの申し出をいただいていたことも事実である。しかし雪処理に不慣れな人が雪国をいきなり訪れ、除雪作業地域としてもボランティアを受け入れた経験がないために、せっかくの申し出を断ってしまったことがあったという。双方をうまくつなげて機能させるために、まず除雪に必要な知識と技術を学んでもらい、平時から雪国の地域住民と、いわゆる「顔の見える関係」を築いていくことが重要になる。一八年豪雪での反省を生かし、翌年一九年の一月に、中越地域の雪の専門家や実務者を中心とした有志メンバーで始めた取組みが「越後雪かき道場」である。

活動内容
～どんなことをするの？～

「雪かき道場」を開催して、二〇一四年で八年目となる。これまでの開催実績は、延べ六〇回程度（二〇一四年二月現在）、毎年百名以上の修了者を輩出している。開催エリアは、長岡市川口や山古志、小千谷市、十日町市など新潟県中越の中山間地が中心だが、山形県や富山県、近年では岐阜県や滋賀県でも開催されている。

参加者は、男性が約四分の三を占めており、北陸圏（新潟・富山・石川）が最も多く、うち新潟県の参加者が一番多い。関東圏からの参加者も約三割を占めている。年代は、三〇代までで全体の約三分の二を占めており、若年層の参加は、過疎高齢化の進む集落に大きな活力を与え、地域活性化の原動力の一つになっている。またアンケートによれば、参加者の約八割が満足であると答えており、参加者側にも地域側にも、双方に利点をもたらす取組みであると言える。

プログラムは、一泊二日の日程で開催されることが多い。雪かきの基本（地上での除雪作業）を学ぶ初級、屋根からの雪下ろしと命綱を学ぶ中級、そして除雪作業の安全管理と安全指導を学ぶ上級の三種類のコースがある。

初級コースは、雪国初心者が多く参加する。従ってまず「雪かき道越後流指南書」（雪下ろしのノウハウをまとめたガイドブック）に沿って、座学で注意点やポイントを伝え、地元の雪かき名人（師範）から、かんじきの履き方、スコップやスノーダンプの使い方、雪下ろしのコツなどを実技指導してもらう。また昼の活動だけでなく、夜に交流会があることも特徴の一つで、地域のお母さんたちが地元の食材を使い、腕をふるって作ったごちそうを食べながら、参加者同士や地域住民との交流を深める。雪かきのノウハウだけでなく、こういった視点から雪国の生活を知ることができるのも「雪かき道場」の魅力の一つと言える。

「越後雪かき道場」の効果
～どのような利点をもたらすのか～

「雪かき道場」は「広域的な雪処理の担い手確保」のみならず、他にもさまざまな効果をもたらしている。先述した夜の交流会のように「雪国体験交流」の側面も重視しており、地元と参加者が交流する機会を設け、継続的な関係づくりのきっかけになるよう配慮している。参加者にとっては、地元の達人から雪かきの技を学ぶ絶好の機会であり、充実感や満足感を得ることができる。仕掛ける側のコーディネーターにとっても、力になりたい人と力を必要としている人や場所を適切につなぐという、コーディネートの訓練の機会にもなっている。

特筆すべきは、地元集落における効果である。安全度や安心度の向上はもちろん、地域内共助や防災力向上の一助にもなっており、地域に元気や活力を創り出す効果がある。主として四点を表にまとめた（表：「『越後雪かき道場』の地元集落における効果」参照）。

今後の展開～
～受援力強化と地域防災力の向上～

地域住民にとって雪かきの技術は、いわば〝暗黙知〟であるが、初心者にもわかりやすくそのノウハウをまとめた「雪かき道越後流指南書」や、子どもにも楽しんでもらえるように「雪かきカルタ」、中級者向けに命綱の取付方法をまとめた「命綱教習書」を制作しており、楽しんで学べるアイテムが充実している。

二〇一〇年には、「防災ホワイトツーリズム」という新しい挑戦を行った。真冬に震度七という豪雪時に大地震発生という想定をし、雪かき訓練だけでなく災害ボランティアセンターの設置訓練なども盛り込んで、地域内外の参加者にとって、地震を含んだ防災訓練の効果も期待して取り組んだものである

二〇一一、一二年と続いた豪雪の際には、その活動意義や必要性を再確認し、プログラムを改良してきた。多数の担い手を増やし、命綱などの簡便で実用的な技術を新たに開発しただけでなく、この取組みを通して地域の元気や活力を創出し、外部の力を受け入れる力（これを「受援力」と呼んでいる）を強化してきた。活動当初はこのような効果を意図していなかったが、最近ではむしろこちらのほうが「雪かき道場」の本質ではないかと認識している。雪かきの知恵や技を伝えながら、地域内外での交流を深め、地域の「受援力」を強化することで、豪雪時の安全ならびに安心を得ていくことにつながるのである。

「越後雪かき道場」は、雪に慣れ、雪のある暮らしに親しみ、雪国の人々と想いを重ねていく場である。その活動が地域に活気を取り戻す一因となった。雪に限ったことではない。自然災害への備えをすることで、地域の自然環境や歴史・伝統を振り返り、地域に誇りを持つことにつながっていく。住民が地域を見つめ直し、愛着を感じ、地域で生きていくことに誇りを持つ地域防災力向上のカギはまさにここにあるのかもしれない。

（地域防災力センター　関谷　央子）

表：「『越後雪かき道場』の地元集落における効果」

①冬の安全度の向上
地域住民が除雪作業の技能や事故発生のリスクを見直す良い機会である。住民にとって雪かきは日常的作業であるため、危険性を意識せずに作業を行ってしまうことが多い。世代交代も進まず、高齢者が事故に遭うケースが近年増えているが、「雪かき道場」の講習に地域住民も参加することで、地元集落の冬の安全度が高まるという効果が得られている。

②冬の安心度の向上
担い手不足が進む集落では、豪雪に対する不安が大きいが、「雪かき道場」の実施により、豪雪地帯の冬の暮らしに関心を持ってくれる人がいること、いざという時に雪かきに来てくれる若者がいることを住民が実感することができ、地域に安心感をもたらす効果がある。

③地域内共助の力と防災力の向上
「想い」を持った地域外の人を受け入れるためには、住民が協力しあい、様々な準備や対応が不可欠で、地域としてのまとまりが必要となってくる。したがって、「雪かき道場」を実施することにより、結果的に地域内の共助力が向上し、地域防災力の向上へと結びつく。

④元気・活力の創出
地域住民が外部の参加者に雪かきを教えることで、自分たちの知恵と技をあらためて認識する。そして厳しい自然環境の中で生きてきたことへの誇りを取り戻していく。雪かきという自然相手の共同作業を介して、地域や世代を超えた交流が住民の元気を生み出し、地域の活力を創出する。

「越後雪かき道場」に関する
お問い合わせ先

NPO 法人中越防災フロンティア
（越後雪かき道場事務局）
〒 947-0205
新潟県長岡市山古志虫亀 3373-1
TEL：0258-59-2308
FAX：0258-59-2305
MAIL：info@c-bosai-frontier.jp

特集②「にいがたイナカレッジ事業報告」

にいがたイナカレッジとは？

にいがたイナカレッジ（以下「イナカレッジ」と略す）とは、中越大震災復興基金の地域復興人材育成支援の一環の事業で二〇一二年度からスタートした事業である。このイナカレッジは、被災した中山間地域の「担い手の育成」を目的とした現場・実践型インターンシップ制度である。

インターンでは、中越の地域づくりの現場で住民の方々と一緒になって汗を流しながら学ぶ「実績型training」（実施研修）と、中越地震を機に活発になった〝地域づくり活動〟の様々な知識や経験を体系的に学ぶ「地域学school」（講義・座学）を組み合わせ、自分らしいライフスタイルの実現を目指す。

プログラムは、「地域づくり」、「六次産業」、「半農半X」などのテーマを設け、参加者・地域の事情に合わせて「一年間」または、「一ヶ月間」で学ぶ。

期間中、インターン生には地域の空き家などを活用して住環境を整備し、最低限の生活費として月五万円を支給し、研修修了後には希望に応じて中越地方での定住をサポートする。

インターン生の動向

インターン参加希望者は若者が多く、今年度の応募では七割を十～三十代が占めた。その要因となったのは、リーマンショックや東日本大震災などが生活の価値観を変えるような出来事があり、多くの若者が社会に対して不安や不満を抱くようになった。

この様な「不安や不満を抱えた若者」が、「地域」の暮らしや人、生き方に出会い、ある種の〝憧れ〟を抱きインターンを希望して来ている。

インターン生の活動

挟間翔平さん

（長岡市小国インターンシップ協議会）

挟間さんは、関東圏の大学を卒業し「長期プログラム」に参加した。挟間さんは教員志望で、子どもたちに「国の農業がどのように行われているか」をしっかりと教えるためにインターンを志望した。

実際の活動では小国インターンシップ受け入れ協議会に所属し、春から秋にかけて地元の農業生産法人で農業を学び、冬は、小国和紙生産組合で和紙作りを学ぶ。挟間さんは今まで地域コミュニティのつながりが強い地域での暮らしを経験していないので、日々学習しながら暮らしている。インターン修了後は、地元の教員になる予定である。

五味希さん

（小千谷市東山地区振興協議会）

五味さんは都内の大学院生で、一年間学校を休学して「長期プログラム」に参加した。大学では地域づくりを専攻し、実際に地域で暮らし、住民の人たちと関わりながら地域づくり活動を学びたいという理由でインターンを志望した。実際の活動では地域活性団体の一員として、高齢者サロンのお手伝いや直売所の運営、都市農村交流事業など、地域づくりに関わる多岐にわたる活動を行う。なんでも積極的に興味を持ち、盆踊りや地域の会合などにも出席し、持ち前の社交的な性格で地域の人たちとの関係性づくりに努め、地域の方からも好意的に受け入れられている。五味さんは、八月にインターンを修了したが、現在も地域との交流は継続している。

今後の課題と展望

イナカレッジは事業をスタートして二年目が経過した現在では、「うちでも受け入れたい」という声が広がり、来年度の長期インターンの受け入れ希望地域が十五地域にものぼった。しかしその一方で、的確に移住希望者に情報を発信できておらず、インターン受け入れ希望地域に対してマッチングした地域が半数にとどまっている。これらの課題解決をするために、「移住女子」（詳細は（http://inacollege.jp/iju-joshi/ を 参 照。）の活動を通し情報発信の強化に努めている。これらの活動を通して、〝憧れられる〟〝希望が持てる〟中越地域を発信し、中山間地域の担い手育成に努めたい。

（復興デザインセンター　日野正基）

シリーズ

人と人

〝被災と研究を通して出来た産官学の繋がり〟

中越沖地震発生当時、柏崎の避難所に防災士として状況確認に入ったのが知り合うきっかけ。長年、食品加工会社で非常食の開発をしていましたが、阪神・淡路大震災の発生で賞味期限の長さだけでなく、真に被災者の役に立つ災害食を考えなければならないと気づかされました。2003年に発熱機能つきの災害食を発売し、翌年の中越地震で被災して災害時に必要な食のありかたを確認できました。

被災経験があり災害時の食を研究している人はごく限られた数しかいません。その中でも土田さんと協働することで、産官学の連携が出来ていると感じます。被災時には普段の繋がりが効果を発揮します。新潟では、繰り返し災害が発生していますので、継続的な連携ができることで、より地域への波及効果が得られると感じています。今後は災害食だけでなく避難生活も含めたより具体的な被災後の生活について研究し、一人一人の防災意識の向上に寄与したいと考えています。

別府　茂

ホリカフーズ株式会社取締役。新潟大学大学院客員教授として食品加工技術論を教える傍ら、関東の保健所等各地で講演も行っている。NPO法人日本防災士会・新潟県支部長。新潟市出身。小千谷市在住。

土田　直美

新潟県庁、柏崎保健所、魚沼保健所を経て現在は長岡地域振興局健康福祉環境部地域保健課課長代理。管理栄養士。被災と栄養・食生活支援活動の経験を生かし災害食を普及している。長岡市出身・在住。

中越大震災は県庁で経験。柏崎では中越沖地震での栄養・食生活支援活動の検討会を企画し、別府さんに企業の立場で参画していただきました。その後、魚沼では東日本大震災被災者受け入れの際の災害食に関する検討会を企画し、中越・中越沖地震を解っていて下さる別府さんにアドバイザーをお願いしました。今は日本災害食学会へ投稿する論文を共著で執筆中です。

産官学連携の強みは地域に浸透させていけること。「行政が言うから」とやってくれる人は一部です。いかに地域に浸透させていくかを考えると、産学との連携は非常に重要です。防災分野の方と同じ土俵で食の大切さを知ってもらうため防災士の資格も取りました。これだけ注力するようになったのは、中越・中越沖・東日本大震災被災者受け入れ・昨年の長岡市の水害と、災害に何度も遭ったからだと感じます。経験した者が伝えていかないと。これからの10年は経験をしくみづくりにつなげたいと考えています。

取材者：長岡震災アーカイブセンター　松井 千明

「移住とは」

復興デザインセンター　金子　知也

私が中越防災安全推進機構に入社してから二年が経とうとしている。もともと東京で地域づくりコンサルタントの仕事をしていて、二年前に長岡にIターンした。私が長岡に来ようと思った最大の理由は、地域復興支援員をはじめ、同年代の人たちが何十人も地域づくり活動を実践していたり、コーディネーターとして活躍している。自分もその一員になって一緒に頑張ってみたいと思ったからだ。いま担当している仕事の一つが、中山間地域への移住促進。そのきっかけとしてIターン留学『にいがたイナカレッジ』というインターンシップ事業を行っている。

そもそも移住というのはどういうことなのだろうか？中山間地域に移住した若者には、ある一つの共通点がある。それは、地域の人や誇りなど『生き方』や『想い』に魅了されて移住・定住しているということ。

例えば、わずか六世帯しかない集落に、ボランティアとして通った二十代の女性は、『あんなお婆ちゃんに自分もなりたい』という理由で移住した。

ある人は、東京で働いていたときに中越地震が発生して、震災復興に取り組む自分の集落がテレビに出ていて、頑張っている故郷で自分も一緒に復興支援を頑張ろうという想いからUターンした。またある人は、集落が掲げる〝将来ビジョン〟に共感して、地域の一員となって一緒に活動したいということで家族で移り住んだ。

移住や定住を考えるうえで必要になるのは、『共感』というキーワードなのかもしれない。そして、それは金銭的・経済的な価値観とは全く違うものである。

近年、都市部に暮らす人たちのなかにも、都会でお金を稼ぐという働き方・生き方ではなく、別の豊かさを農村に求める人達が増え、その数は一都三県でも百万人とも二百万人とも言われる。なかでも、「退職後の第二の人生を田舎で…」というシニア世代ではなく、近年は二十歳代や三十歳代の若者や子育て世代の〝ふるさと志向〟が増えてきている。

話を戻すと、私自身も東京からの移住者である。私から見る地域の皆さんの暮らしは、もちろん大変な部分もたくさんあるだろうが、その大変さよりも魅力を感じる部分の方が圧倒的に多い。『やっぱり子育ては地域のなかで…』最近は、妻とどこに家を構えるか（街中なのか農村部なのか）を話し合う機会が増えている。

私の家庭の事情はさておき、経済的な価値とは違う地域の魅力をどう発信し、それを都会に暮らす人たちにどのように届けるか。そしてインターンシップ事業などをきっかけにして、過疎化が進む地域にどのように移住者を増やしていくか。与えられた使命はすさまじく大きい。そして、それには是非地域の皆さんにも生き生きと誇りを持って暮らし続けていただきたい。そこに〝共感〟してくれることが、移住のきっかけであるのだから。

cosss report VOL5 - 2013 秋号 - 平成 25 年 11 月発行　発行 / 公益社団法人 中越防災安全推進機構　cosss report 編集委員会　新潟県長岡市大手通り 2-6 フェニックス大手イースト 2F　TEL 0258-39-5525 FAX 0258-39-5526 E-mail info@c-bosai-anzen-kikou.jp http://c-bosai-anzen-kikou.jp/ FREE

≪インフォメーション≫

【第 65 回全国植樹祭　6 月 1 日（日）開催！】

新潟県で行われる全国植樹祭までついに半年を切り、開催を盛り上げるムードが徐々に高まってきました。お手植え会場となる川口運動公園周辺では、雪解けを待ち地域住民でも植物を植えて両陛下を迎えようという声など、中越地震の際の行幸啓から約 10 年ぶりの御来訪へ期待の声が上がり、着々と準備が進められています。

【企画展「復興 T シャツ展」を開催します！】

３月１日（土）～３月 31 日（月）の期間中、長岡震災アーカイブセンターきおくみらいにて、「復興 T シャツ展」を開催します。中越大震災・東日本大震災の被災地では、被災後多くの地域づくり団体が立ち上がり活動を行ってきました。その中で作られた様々な「復興 T シャツ」を取り上げ、当時の想いや記録を紹介し、復興に取り組んできた人々の姿をお伝えします。

≪コラム・視点防災≫

【これから先の 10 年を考えて】

２月６日、小千谷市役所に事務局を置く「中越大震災ネットワークおぢや」が、第 18 回防災まちづくり大賞「総務大臣賞」を受賞した。中越大震災の災害対応で現場から得た教訓を共有することを目的とした研修会の開催などの活動が評価されたものである。全国の自治体を中心に構成団体は 72（平成 25 年 9 月現在）を数え、増え続けている。

また、2 月 11 日には「中越大震災ネットワークおぢや」の副会長を務める重川希志依教授（静岡県富士常葉大学）等の協力により小千谷市役所が主催する市民ワークショップ「震災を乗り越え、よりよい小千谷を目指して」が開催された。震災時、地域のために奔走した方や震災当時は就学中の方、震災後小千谷に移り住んできた方など様々な立場の方々が「小千谷の未来を表すキャッチフレーズ」を語り合った。

震災 10 年、被災地では復興計画の検証が進んでいる。これによりまた多くの知見が集積されるであろう。中越大震災の被災地が担う大事な使命は震災の記憶を「伝えていくこと」。そしてこれから先の 10 年をしっかりと見つめていくことと考える。

おぢや震災ミュージアム「そなえ館」細貝悠斗

会員募集中！

当機構では私たちを応援してくれる会員を募集しています。
地域防災への取り組みや被災地への支援活動に賛同し、応援いただける会員を募集しています。
正会員：年会費５，０００円／年
団体賛助会員：１００，０００円／年
個人賛助会費：３，０００円／年
※申込書は当機構ホームページよりダウンロードできます。

公益社団法人 中越防災安全推進機構 機関紙 <COSSS report>　第６号　2014 年２月発行
発行人：山口壽道　　編集：関谷央子　日野正基　松井千明　渡辺千明　細貝悠斗
〒 940-0062　新潟県長岡市大手通り 2-6 フェニックス大手イースト２F 長岡震災アーカイブセンタ - きおくみらい内
TEL：0258-39-5525　FAX:0258-39-5526
E-mail:info@c-bosai-anzen-kikou.jp　http://c-bosai-anzen-kikou.jp/

施設のご案内

長岡震災アーカイブセンター きおくみらい

【住所】
〒 940-0062
新潟県長岡市大手通 2-6
フェニックス大手イースト２階
【開館時間】
〔入館無料〕10:00 ～ 18:00
【休館日】
毎週火曜日 年末年始
【TEL】
0258-39-5525
【FAX】
0258-39-5526
【e-mail】
kiokumirai@cosss.jp

おぢや震災ミュージアム そなえ館

【住所】
〒 947-0026
新潟県小千谷市上ノ山 4-4-2
小千谷市民学習センター「楽集館」２階
【開館時間】
〔入館無料〕9:00 ～ 17:00
【休館日】
毎週水曜日 年末年始
【TEL】
0258-89-7480
【FAX】
0258-89-7485
【e-mail】
sonae@cosss.jp

川口きずな館

【住所】
〒 949-7503
新潟県長岡市川口中山 1441
川口運動公園内
【開館時間】
〔入館無料〕10:00 ～ 17:00
【休館日】
毎週火曜日 年末年始
【TEL】
0258-89-3620
【FAX】
0258-89-3621
【e-mail】
kawaguchi-info@cosss.jp

やまこし復興交流館 おらたる

【住所】
〒 940-0204
新潟県長岡市山古志竹沢甲 2835
やまこし復興交流館（旧山古志会館）
【開館時間】
【入館無料】9:00 ～ 17:00
【休館日】
毎週火曜日　年末年始
【TEL】
0258-41-1203

ながおか市民防災センター

【住所】
〒 940-0082
新潟県長岡市千歳 1-3-85
ながおか市民防災センター２階
【開館時間】
〔入館無料〕9:00 ～ 18:00
【休館日】
年末年始
【TEL】
0258-39-5525
【FAX】
0258-39-5526
【e-mail】
info@c-bosai-anzen-kikou.jp